

混交の寓話

—The Rag Doll Plagues 論—

大 森 義 彦

I

Alejandro Morales (1944-) の *The Rag Doll Plagues* (1992) は、ペストあるいは疫病を中心的メタファーに据えた風刺小説であり寓話である。タイトルの *The Rag Doll Plagues* は、和訳すれば「ぬいぐるみペスト」とでもなろうか。 *La Mona* という通称を持つペストなのだが、その犠牲となった者の身体には死後硬直などは起こらず、まるで「ぬいぐるみ (rag doll)」のように手足をだらりとさせたままであるということからついた呼称である。そのようなペスト・疫病が全体を通して猛威をふるうのが作品 *The Rag Doll Plagues* であるが、何が風刺の対象となり、何の寓話となっているかといえば、メキシコ系アメリカ人とヨーロッパ系アメリカ人の、つまりチカーノとアングロの関係の歴史である。

ただ、この作品では、歴史は未来をも包含する形となっている。作品は第一部 (Book One) から第三部 (Book Three) までの三部構成になっていて、“Mexico City”と題された第一部は1788年、“Delhi”と題された第二部 (Book Two) は1979年、そして最後の“LAMEX”と題された第三部は21世紀も終わりに近い2080年前後という時代設定である。*The Rag Doll Plagues* はそのなかに近未来小説をも含む構成となっているのである。これを言い換えれば、コロニアル→ポストコロニアル→ポストナショナルという流れの構成ということになろう。第一部の舞台は、現在のアメリカ南西部も含めて西半球の多くの地域がニュースペインという言葉でくくられていた植民地時代末期のメキシコであり、第二部の“Delhi”とは、現在の合衆国ロサンゼルスに数多くあるメキシコ系居住区バリオのうちのひとつを指す名前である。そして第三部の“LAMEX”とは、合衆国とメキシコとの間の国境がほとんど消滅したに等しいL.A.からMexicoに至る広大な地域あるいはメガロポリスを指す。こうして、*The Rag Doll Plagues* はその章立てにおいて、植民地期メ

キシコから始まって現在のU.S.Aロサンゼルスを経由し、それらふたつが融合したかと感じさせる21世紀末“LAMEX”へという、ほぼ300年にわたる道筋をたどる。そしていずれの章でも、人々はペスト *La Mona* の脅威にさらされる。

The Rag Doll Plagues は、ペストが共通項となることによって、異なる時代がつながる歴史小説ともいえる。メキシコ系作家の作品にはこれまでも歴史小説的要素を持つものが少なくなかった。刻みこまれてきたはずのメキシコ系の痕跡が公認の歴史から抜け落ちているという不満もあり、アイデンティティ確認の術という意味合いもあり、過去を掘り起こし光を当てるといった作業を創作の中心に据える作家が多かったのである。Moralesのこの作品もその流れに沿うものではある。しかし、彼は過去へと遡及してそこから現代を照射するという従来の方法に加えて、時間軸を未来にも伸ばして作品全体を寓話仕立てにするということを試みた。メキシコ系作家の手になるものでこのような構成の小説は珍しい。

The Rag Doll Plagues に対する評価には否定的なものもある。Wildermuthなどは書評のなかで、“Morales’s work fails to engage on almost every level” (122) と述べて駄作と断じている。また、Villalobosは、Moralesがメキシコ・シティーによってメキシコ全体を表す“false synecdoche” (135) を用いていると批判し、そのメキシコ・シティーとロサンゼルスをつながりだけに焦点が合わせられることで、それら二つの都市の間に存在するはずの“the peripheral in-between border region and its dwellers” (136) がまったく無視されていると不満を表明している。Villalobosの分析を「鋭い (“astute”)」と評して引用しているDuranもその批判と不満を共有しているようである。(396) しかし、VillalobosやDuranはこの作品が寓話であることにあまり注意を払わず、リアリズムの作品の場合と同様のものを求めようとしているの

ではないだろうか。寓話の場合は、扱うものが何であれその細部を大胆に捨象することは許されるはずであり、そうすることで逆に作品がリアリティを帯び、小説的効果が増すことも多い。

*The Rag Doll Plagues*を高く評価したうえで分析を試みた論文もいくつか出ている。そのなかで、共に異人種・異文化混交のテーマに焦点を絞って論を展開しながら、対立するような解釈に至っているのがMiguel Lopez LozanoとMarc Prieuweである。多くのメキシコ系作家に見られるように、Moralesもこの作品で、“miscegenation”, “hybridity”, “mestizaje”といった言葉で表される人種混交・混成をテーマに取り上げている。そのテーマに関して、LozanoはMoralesが描き出そうとしたのは“the shortcomings of concepts such as mestizaje” (42) であると述べ、混交がネガティブに捉えられていると繰り返し指摘する。一方Prieuweは、“The text, in its subversion of racial and cultural purity, posits miscegenation and hybridity as potentially positive, even liberating, forces” (400) として、混交がまさにポジティブに提示されていると解釈する。しかも、この作品で混交が肯定的に提示されていることを示す証左として、引用にもあるように、人種や文化の「純粋性 (“purity”）」へのこだわりを打ち砕く作品となっている点を挙げている。Lozanoの論文のほうはいわばサバルタン批評とも呼ぶべき体のもので、そういう立ち位置から、この作品に混交ではなく“a multicultural agenda” (42) を支持する姿勢を読み込もうとしている。各人種・民族の独自性と「純粋性」の保持を前提とする多文化主義の視点からの読みなのである。同じ作品の同じテーマと向かい合っても、二人の解釈がきれいに分かれるのは当然とも言える。

Moralesはこの作品を寓話仕立てにするばかりではなく、自己言及性を持たせてメタフィクション仕立てにもして、それも論じるに値する点である。しかし、本稿ではその点はひとまず置いて混交の問題に焦点を絞り、基本的には上記Prieuweの解釈を支持する側に立って、その解釈をさらに補強する形となるよう*The Rag Doll Plagues*についての分析を試みる。

II

第一部の“Mexico City”では、すでに述べたように、18世紀末の植民地期メキシコが舞台である。語り手/主人公はDon Gregorio Revueltasという名のスペイン人医師で、スペイン国王から、メキシコに蔓延し多く

の犠牲者を出している疫病を撲滅する方途を見つけよとの命を受けてメキシコにやって来る。その疫病/ペストは現地では*La Mona*と呼ばれている。ここで注目したいのは、Moralesが第一部の語り手/主人公を「純粋」のスペイン人としたことである。第二部と第三部の語り手は、名前こそ英語風にGregoryとなっているものの、ともにこのGregorioの子孫という設定である。二人のGregoryはメスティーソのメキシコ系アメリカ人として登場する。Marquezの表現を使えば、これら三人が“a historical relay team” (83) を構成し、それぞれが18世紀末、20世紀末、21世紀末の語りを担当している。Moralesはその“team”のトップバッターをインディアン（インディオ）あるいはメスティーソとして設定することもできたはずである。そうすれば、*The Rag Doll Plagues*は、植民地支配に翻弄された側の視点からの語りという点で一貫性のある物語となっていたであろう。しかしMoralesはあえてそのような一貫性を持たせず、第一章ではスペイン人の視点と語りを採用した。その結果、スペイン人の意識が明るみに出され、征服者が被征服者に向ける視線がどのようなものであったかが浮き彫りにされるという効果を生み出している。そして重要なのは、その征服者スペイン人の意識と視線の変容も描き出されているということである。

1788年にメキシコ・シティーに到着したGregorioは、*La Mona*の猛威を目の当たりにして驚きつつ、衛生環境の想像を絶するほどの劣悪さ、街がソドムと化していると思わせるほどの現地人のモラルの低下に観察の目を向ける。彼の目にはメキシコ・シティーは“demoralized capital” (11) と映るのであり、至る所に“the decadence of the city” (15) を見て取る。さらに、そこに住む者たちは“Indians, Mestizos, Negroes, Mulattoes and the other immoral racial mixtures of humanity” (11) であり、それゆえに“soulless creatures of God” (13) なのである。このように「人種混交 (“racial mixtures”）」を否定的に捉えるスペイン人医師Gregorioは、“the latest medical advancements of Europe” (15) を植民地に導入することで疫病を撲滅し、国王の期待に応えることができると考える。その障害となるのは“curanderos”の存在であった。

The physicians in Mexico would begin to study these new discoveries and make them available to the mass population. In this way,

the male and female Spanish-speaking practitioners of witchcraft, the popular *curanderos*, would be forced out of circulation. These *curanderos* were dangerous and had caused the deaths of thousands. Worst of all were the Indian *curanderos* who practiced witchcraft in their native tongue. They had to be prevented from practicing their evil craft. (16)

植民地支配者側の典型的な発想が出ている。もちろんここで“*curanderos*”とは、北米インディアンの場合でいえばメディシンマン (medicine man) に相当する民間療法医または呪医である。Gregorioは、これら“*curanderos*”の療法を未開社会に特有の原始的な「魔術 (“witchcraft”)」にすぎないとみなし、疫病撲滅のためには、一刻も早く近代ヨーロッパの進んだ医学に取って代わられるべきと考える。この時点でのGregorioはヨーロッパの文化・文明の優位性を信じて疑うことはない。そして、自分自身が最新の医学的知見を体現していると自負しているGregorioは、そのヨーロッパ流の医療をメキシコで試みようとする。

興味深いのは、上に引用した一節のすぐあとに来る文章である。“I came to assess the medical needs of His Majesty’s colonies”とあって、次のように続く。

By improving the health and medical treatment of the common population, the King desired to avoid a spirit of separatism here. He was well aware that the French revolutionary emotion was contagious and that the success of the United States independence movement could affect the future direction of the Empire. The people of the colonies had to be convinced that they were better off living as part of the Empire than separate from it. Therefore I was here to quell the fires of revolutionary fervor by extinguish the illness in the fevered populace. (16)

「伝染しやすい (“contagious”)」のは疫病だけではなかったわけである。16世紀以降「新世界」に版図を拡大してきたものの、植民地に対する影響力に翳りが見え始めた18世紀末のスペイン帝国は、同時期に起こったフランス革命やアメリカ独立運動で示された「分離主義の精神 (“a spirit of separatism”)」と「革

命への熱気 (“revolutionary fervor”)」が自らの領土に「伝染」し飛び火することに警戒感を持っていた。実際、この小説の第一部の時代設定は1788年から1792年だが、それからわずか30年ほどの1821年には、メキシコはスペインからの独立を勝ち取ることになる。Moralesはこうしてペストの蔓延と政治状況を重ね合わせてみせる。Gregorioが国王から託された任務には二重の意味合いがあった。

課せられた使命を忠実に果たそうと、Gregorioはペスト患者の治療と予防にヨーロッパの医療技術をもって臨む。この行為に寓意を読み取ろうとするなら、それは植民地メキシコに住む者たちをヨーロッパ文明に同化させようとする意志ということになろう。しかし、Moralesは事態を逆の方向へと進める。つまりこの章は、“*curanderos*”の行為を“witchcraft”にすぎないと切って捨てていた当のGregorioが、やがて植民地の文化に同化していくという展開になっているのだ。このことはFrancoも“the growth of empathy and the process of assimilation” (65) という表現で指摘している。「ヨーロッパの最新の医療 (“the latest medical advancements of Europe”)」をもってしても、*La Mona*の犠牲となる者の数は一向に減らない。“I grew more powerless against her [*La Mona*]” (39) と、挫折感を覚えながら1年、2年と時間は経過していくのだが、その間にGregorioの姿勢は徐々に変化していく。現地の人々や文化に対する理解は深まり、愛着すら感じ始めるようになる。

Gregorioが「同化のプロセス」をたどるようになるにあたっては、一人の先例あるいは先達の存在が大きな意味を持っていた。Gregorioのメキシコ到着以来案内役を務めていたJude神父である。彼は*La Mona*について、“This disease takes everyone, regardless of sex, race, age or rank. It is a just disease” (21) と述べる。区別、差別なく、征服した側であるか征服された側であるかを問わず、いわば平等に人間を襲うという点で*La Mona*は「公正な (“just”)」疫病だというのである。これはもちろん、「インディアンだけを殺す (“exclusively kill Indians” (21))」ためにヨーロッパ人が新世界に病気を持ちこんだこともあるという歴史上の事実を念頭に置いての発言である。帝国の崩壊を期待しているかのようなJude神父の物言いにGregorioは怒りを覚える。しかし、二人の関係が緊密さを増して行くにつれ、Gregorioの考え方もJude神父のそれに近いものになっていく。Jude神父はGregorioの案内役だけでなく教育係も務めているかのようであ

り、スペインとニュースペインの関係の捉え方という点で、Gregorioは彼に影響を受け、感化されていくのである。

Jude神父の家を訪れたとき、Gregorioは以下のように観察し述懐する。

The house was comfortable and orderly. It was decorated with common furniture made by Indian and Mestizo craftsmen. Elegance did not describe the atmosphere of Father Jude's home, but it was seductively alive with Mexican colors from handwoven blankets, pillows, rugs, tapestries, gabans and more native items. I do not believe that there were any Spanish products in his home. It was Mexican, warm and beautiful. And I felt a strong sense of love. (48)

“Indian and Mestizo craftsmen”の手になる家具が飾られた家は“Mexican colors”で彩られていて、“Spanish products”は一つも置いていない。Jude神父のメキシコ土着文化への同化を読み取れる一節であり、同時に、神父の同化に対してGregorioが肯定的な眼差しを向けていることを示す一節ともなっている。

GregorioがJude神父を介してもう一人の神父と会見する場面がある。神父であると同時に医師でもあり歴史家でもあるというFather Antonioである。彼はローマカトリックの在メキシコ異端審問所 (the Holy Office) で“General Secretary”という重要な役職にも就いている人物なのだが、GregorioはそのAntonio神父に、ペストを抑え込むためにはどのように医療を改善すればよいのかとアドバイスを求める。Antonio神父の応答の中には、“The Holy Office must stop persecuting the *curanderos*, for they are an asset to us. [...] It is not important that they speak Latin. They save more lives with their vulgar language than we do with our sanctified words” (40) というような内容も含まれる。いわば体制内批判と取れる発言であり、“*curanderos*”を「財産 (“an asset”)」と呼んで擁護している。“*curanderos*”の行為を“witchcraft”と同一視し、排除すべきものとみなしていた到着直後のGregorioなら激しく反論したところであろう。しかし、すでに見てきたように「同化のプロセス」をたどっていたGregorioの耳には、Antonio神父の言葉は説得力をもって響くのである。実際、Antonio神父が教皇庁の指示に反する活動をしているとの噂を耳にしていた

Gregorioは、上の言葉を聞く前にすでに“I admired and advocated that activity” (39) と語っている。

患者の治療にあたって“*curanderos*”が用いる薬を自らも使うようになったGregorioの「同化のプロセス」は、最終的にはスペインとの決別へと至る。“[M]y concerns were no longer of life in the Old World, but of life here in Mexico” (64) と考えるGregorioは、はるばるスペインから会いにきたフィアンセRenataとの婚約を解消する。船でスペインに帰ることになったRenataを見送りに港まで行った時の様子について、“I waved once and walked away from Renata's and Don Juan Vicente's Spain” (66) とあり、スペインとの決別が表現されている。ここで、Renataと並んで名前が挙げられているDon Juan Vicenteは、植民地ニュースペインの総督だった人物である。任を解かれて本国へ帰還するためRenataと同じ船に乗っているのである。Gregorioにとっては総督も婚約者も共に本国スペインを具現し、それゆえに本国とのつながりを確認させる存在であった。その二人の名前をスペインに冠したうえで“walk away”と表現することで、決別への意志が強調されている。

それだけではない。VicenteはGregorioを植民地メキシコに留まらせるきっかけを作った人物でもある。VicenteにはMariselaという名のそばめがいて、彼女はインディアンだった。彼はMariselaとの間に7歳ぐらいのLaurindaという娘をもうけていたが、その娘がバスト*La Mona*に冒されていて、治療をGregorioに依頼したのだった。治療は功を奏さず、娘は死ぬ。その数ヵ月後Mariselaが妊娠していることが判明するが、彼女自身も*La Mona*に冒されていた。出産が近づくにつれ病も悪化してゆき、Gregorioは冒された身体の部位を次々切断するほかに対処の方法を見つけれない。やがて四肢をほとんど失って上半身だけになったMariselaに帝王切開を施し、Gregorioは女の赤ん坊を取り上げる。しかし、赤ん坊が無事に生まれたことを確認した直後、両腕を切断されているので自分で抱くこともできないまま、Mariselaは息を引き取る。Gregorioはその赤ん坊にMonica Mariselaという名前を与え、自分の養子として育て始める。Gregorioがスペインを捨てメキシコを選んだのは、このMonicaへの愛着ゆえであった。彼は婚約者Renataがメキシコを訪れる前の段階で、“I labored for a better world, a better Mexico for Monica Marisela” (61) と述べている。

ここで問題は、スペイン人総督とインディアン女性

との異人種間混交の産物であり、それゆえメスティーサ (mestiza) であるMonicaの誕生が、小説中でどのような象徴性あるいは寓意性を持っているかということである。Lozanoはこの点については重視していないようで、“assimilation”に代わってそれとほぼ同義と思われる“transculturation”という言葉を使いながら、この章で焦点が合わされ強調されているのはあくまで“the transculturation of the Spanish doctor Gregorio de Revueltas” (53) であるという見解である。それに対して、たとえばPrieweは、Monicaのことを“the hybrid Monica Marisela”と呼んだうえで、“[T]he emergence of new mestiza life[. . .] can also be seen as allegorical of Mexico’s coming-into-being” (404) と述べている。Monicaの誕生がメスティーソ国家メキシコ誕生の予兆となっているという解釈であろう。たしかに、Monicaの誕生を、ひとりGregorio個人の「変容 (“transculturation”）」の到達点を指すものと解釈するのでは不十分である。彼女が生まれるのと軌を一にして、メキシコ社会そのものにも変化が生まれたという趣旨の記述があることを無視できない。たとえば、“It seemed as if with her [Monica’s] birth, *La Mona*’s attacks on the populace had dwindled to nothing. By April 1792, no new cases of *La Mona* had been reported” (61) とあって、Monicaの誕生と疫病の鎮静化が結び付けられている。また、先ほど引用した“I labored for a better world, a better Mexico for Monica Marisela”のあとには“I sensed a new attitude toward life grow within the people”と続いている。その“new attitude”とは次のようなものである。

Intellectuals declared that human beings should no longer be oppressed by the trinity of the king, the priest and the landed aristocrat. They proclaimed that governments should be based on the consent of the people, that religion should be a private matter, that society should no longer be divided into hereditary classes, that a person should rise as high as talent would carry him. These ideas soon circulated amongst the folk. In the streets, in churches and in taverns, I heard the people discuss the future of their country. (61-62)

スペイン国王が心配していた伝染性の「革命への熱気」と「分離主義の精神」が植民地の人々の間に浸透

し始めたわけである。Gregorioをメキシコに赴かせた国王の狙いは、疫病を撲滅し社会の安定を確保することで、自主独立への気運というもう一つの伝染病が植民地の人々の間に広がるのを防ぐことであった。国王にとっては、文字通りの疫病も革命・独立への情熱も、いずれも除去すべき<病>にほかならなかった。皮肉なことに、つまり国王の狙いとは逆に、あたかも疫病*La Mona*の勢いが衰えるのを待っていたかのように、“new attitude”たるもう一つの<病>に人々が冒されることになる。そしてこの<病>の発生は、メスティーサであるMonicaの誕生と軌を一にしているのである。Monicaの誕生にメキシコ国家の胎動を重ね合わせ、寓意を読み取るPrieweの解釈は妥当なものであろう。さらなる皮肉は、Monicaの出産に立ち会って<病>の発生に関わり自らもその<病>に深く冒されているのが、医療の導入を通じて植民地メキシコにヨーロッパ文化を植え付ける役割を担っているながら、土着文化に同化してしまったGregorio本人だったということであろう。Gregorioが、期待される新生メキシコにどれほど一体化しているかは、第一章の最終部分での、“I kissed Monica Marisela and I heard liberation in her innocent giggle, which offered a new century in my new country” (66) という文を見れば明らかである。混交の産物であるメスティーサMonicaこそが、Gregorioが新たに選び取った国メキシコの、自由に満ちた新たな世紀の到来を告げる象徴的存在なのである。

Francoは、Monicaの誕生が新生メキシコの象徴であることを肯定したうえで、“Morales uses Monica Marisela’s birth to symbolize the roots of Mexican and, subsequently, Chicano culture” (63) とも述べている。Monicaが現在のメキシコ人だけでなく、チカーノ、すなわちメキシコ系アメリカ人のルーツでもあるとの趣旨である。その根拠としてFrancoは、上の引用の直後に“anticolonial, revolutionary, mixed, and born out of fragments” (ibid.) という語句を並べて、それらがMonicaの誕生の含意するものであるとしている。ここでは、最後の「断片から生まれた (“born out of fragments”）」という表現に目を向けたい。メスティーサであるがゆえというのは当然のことだが、「断片から生まれた」がゆえにMonicaがチカーノのルーツの象徴であるとはどういうことか。自明のことであると思ったか、Francoはその説明にはほとんど言葉を費やしていない。そこで、作品に即してあえて敷衍すればこういうことになるだろう。前述したように、病魔*La Mona*に襲われたMariselaを救うために、Gregorio

は彼女の左右の手、腕、足と、冒された身体の部位を次々切断していくほかなかった。左の上腕部の切断のときなどは斧を使うほどであった。その結果、Monicaを生む直前のMariselaは四肢を失った“a distended limbless woman” (58) となっていた。つまり「断片」と化していたのである。Monicaはその「断片」から生まれた。ここで、再三にわたる切断手術によるMariselaの身体の断片化を、ニュースペイン建設以降のメキシコの歴史に重ね合わせ、その象徴と解釈してもよいだろう。一定の同質性を保持していた土着の文化が、異質な国による植民地化によって全体性と統合性を奪われ断片化していったのがメキシコの歴史であった。そのメキシコの北部一帯が、もう一つの異質な国である合衆国に組み込まれ、つまりはメキシコから切断され、断片化がさらに進んで生まれたのがチカーノと呼ばれる人々である。このように見れば、母の身体が繰り返し切断されて「断片から生まれた」Monicaは、たしかにメキシコ人およびチカーノのルーツの表象なのである。

III

Gregorioのニュースペインから2世紀後の20世紀末ロサンゼルス・バリオに舞台が移り、彼の子孫とされるGregory Revueltasが語り手・主人公となるのが第二部“Delhi”であるが、そこでは小説自体に「断片」(fragment)という言葉が使われている部分がある。チカーノの医師であるGregoryにはユダヤ系の恋人Sandraがいて、彼女の部屋にいたときに経験したことが、“I stood against the setting sun and saw my shadow shattered on her Peruvian rug. I struggled to recapture my fragmented being, piece by piece. I proceeded without an essence” (79) と、シュールに表現されている。“fragmented”はもちろんのこと、加えて“shattered”という単語の使用にも、上に述べてきたような内容との呼応を読み取るのは妥当なところであろう。己の存在の根っこが「断片から生まれた」Monicaにまで遡及するチカーノであるがゆえに、そして断片化はMonica以後も続いてきた過程であるがゆえに、現在を生きるGregoryはそれら断片をひとつひとつ拾い集めて自分の存在に統合性を与えようと試みるのである。

主人公Gregoryのそのような姿の描写も含む第二部は、時代が第一部の植民地期でもなければ第三部の近未来でもなく、小説*The Rag Doll Plagues*が発表された時点での〈現在〉に近い1970年代後半に、しかも舞

台はチカーノのバリオに、設定されている。メキシコ系の人々の間に民族意識の高揚が見られた時代であり場所である。そのことを反映させようとしてであろう、Moralesはこの章ではしばしばストーリーの中にアストラン伝説などのアステカ神話の要素を盛り込んでいる。カリフォルニアに数多くあるバリオに触れるときにも、“the barrios of Southern California, the real Aztlan, the origins of my Indian past” (71) というような表現が与えられる。このような表現は、アストラン伝説によって自らの先住性とアイデンティティの確認を果たそうとするチカーノ作家の作品によく見られたものであった。第一部の主人公Gregorioはスペイン人であり、メスティーサMonicaの出産と養育に関わりはしたものの、自身がインディアン女性と交渉を持つことはなかったし、したがってメスティーソ/メスティーサの子をもうけるということにはなかった。少なくとも、そういう事実が発生しないうちに第一部は終わっていた。しかし、そのGregorioの子孫であるとされるGregoryが“my Indian past”と言っている。読者としては、第一部のストーリーが終わってから、Gregorio自身に異種混交の事実が発生したと推測するほかない。

いずれにしても、多くのチカーノ文学に見られるように、自身の「インディアンの過去」を強調する人物が主人公/語り手として設定されているのが第二部である。そして、ここで疫病はエイズという形で現れ、犠牲となるのはGregoryの恋人Sandraである。彼女は血友病のため頻繁に輸血を必要としていて、その輸血から感染したのであった。第一部のGregorio同様に医師であるGregoryは彼女の治療に努めるが、血友病患者であるだけでなくエイズ患者でもあることが判明してからは、同僚の医師や看護師からの協力は得られなくなる。Sandraとの接触を避けようとするのだ。無理解と偏見から「汚染物 (“scum” (112))」扱いされるSandraとバリオの住人との間に、被差別という点でパラレルな関係が成立しているのは、Lozanoの指摘の通りである。(57) ロサンゼルススの病院に(ということは西洋医学に)見放されたSandraは、最後の望みを“curanderas”の診断と治療に託そうと、Gregoryと共にメキシコに渡る。Sandraの症状を診た“curanderas”が発した言葉は“It is an ancient plague. There are records describing it” (122) であった。しかも、“They [curanderas] gave it a strange name, *La Mona*” (ibid.) とある。エイズは現代によみがえった*La Mona*だったわけである。実際、Sandraが

“curanderas”に会ったのは、第一部で200年前に Gregorioが居を構えていた、メキシコ・シティー近くの町Tepotzotlanであった。

ロサンゼルス of 医師たちのように接触を拒んだりしない“curanderas”との交流により一定の精神的安定を得るものの、結局“*There is no cure for La Mona*” (123) と言われて合衆国に帰国したSandraは、やがて息を引き取ることになる。それが第二部“*Delih*”の終わりなのであるが、Sandraについて注目したいのは、すでに述べたように、彼女がユダヤ系だということである。そのユダヤ系の女性がメキシコ系のGregorioと恋人同士になり、流産はするものの一度は妊娠している。第一部には見られなかった、主人公自身が関わる異人種混交の可能性があったのである。Lozanoは、Sandraが流産したという事実をとらえて、そのことによってMoralesは“the shortcomings of miscegenation”を強調し、“mestizaje”の称揚を避けている、というような解釈を示している。(59-60) たしかにMoralesは手放しで異人種混交を礼賛しているわけではないであろう。しかし、だからといって、混交の否定にこそ作品のポイントがあるかのような解釈には説得力がないように思える。第一部でメスティーサMonicaの誕生に「新しい世紀」の希望を見出す人物を主人公にしたMoralesが、この第二部でも（そして第三部でも）異人種間の交わりを中心としてストーリーを展開させているという事実から浮かび上がるのは、混交をむしろ積極的、肯定的に捉えているMoralesの姿勢であろう。

第二部にはそのことを示唆する別の要素が含まれている。ここには比喩的レベルでの混交も織り込まれているのだ。どういうことかといえば、「インディアン of 過去」を重視し誇りともするGregoryは、ユダヤ系のSandraのなかにアステカ神話の女神を見ている。あるいは彼女を女神と重ね合わせている。たとえば、Sandraについての、例によってシュールな次のような文章がある。

As evening approached, my eyes passed over Sandra's forehead and traced the path of the moon that rose full above the balcony of her apartment. Sandra slept on a cloud hovering over Orange County, California. I traveled easily through Sandra's womb, as I did through her dreams, and I found that her face had been transfigured into the face of a serpent made up of two great serpents. She dressed in odd

clothes that I had never seen before. She wore a singing skirt of undulating fields of corn. Her skirt became crystal and water. [. . .] (76-77)

ここでGregoryがSandraのなかに幻視しているのは、アステカ神話の地母神コアトリクエ (Coatlicue) である。ナワトル語「コアトリクエ」には「蛇のスカートをはくもの」という意味があり、その像の腰回りには二匹の蛇がからみついている。上の引用で“serpent (s)”, “skirt”という単語が出てくるのはそのためである。別の箇所では、メキシコ滞在中に現地のインディアン of 儀式に参加したときのSandraについて、“Sandra danced like energy among them. Serpents wreathed out from her punctured skin. Sandra was the god Coatlicue and I feared her” (126) と、はっきりとコアトリクエの名前を出して同一視している。このようなSandraを、Herrera-Sobekは“an Anglo Coatlicue” (103) と呼び、さらには、“Oddly enough, although Anglo, she [Sandra] is linked with pre-Columbian motifs” (ibid.) と述べている。ユダヤ系の人物をも“Anglo”という言葉で表わしているわけで、いわゆるヒスパニックにとって、この言葉の意味の幅がいかに広いかを確認させてくれる。それはともかく、Sandraが“an Anglo Coatlicue”なら、そのことも混交を、この場合は異文化混交を、表わしているのではないか。“cultural”という言葉で冠した“mestizaje”ではないか。「アングロ」と呼ぶにせよユダヤ人と呼ぶにせよ「インディアン of 過去」とは縁のないはずの人物Sandraに、まさにその「インディアン of 過去」を体現させている。“mestizaje”という言葉は元来、基本的にはスペイン人とインディアン/インディオの間での混交を指していたということもあり、チカーノを初めとするヒスパニックに専有されてきた。混交・混血を意味するという事実を考えれば皮肉なことながら、その“mestizaje”がチカーノの固有性を表すものとして称揚されてきた。言い方を変えれば、ある意味では“mestizaje”の＜本質化＞が起こっていた。その背後にあったのは、「アングロ」との差異を明確にし、それによって確たるアイデンティティを獲得しようとする意志であっただろう。かつて、自身もチカーノである批評家Bruce-Novoaは、チカーノ作家全般の欠点で、“the possibility of a further Chicano-Anglo American mestizaje” (56) を視野に入れようとしないう点にあると述べて、その硬直性を内側から批判していた。それは結局、“mestizaje”の＜本質化＞に対する批判だったと解釈できる。非チ

カーノのSandraをコアトリクエと重ね合わせることで“mestizaje”の概念を押し広げ、〈本質化〉と固定化から解き放とうとするMoralesには、Bruce-Novoa言うところの“Chicano-Anglo American mestizaje”の可能性を提示しようとする姿勢が見られる。

そのように見てくれば、*The Rag Doll Plagues*を著したMoralesと、Brown (2002) で異人種混交をアメリカの歴史と現在の一部として認知し肯定することを主張したRichard Rodriguezとの間に近さが感じられないでもない。もちろん、アステカの過去にルーツを求めることを拒否するRodriguezと違って、Moralesは「インディアンと過去の」との紐帯を否定してはいない。否定していれば、そもそもコアトリクエなど持ち出すはずがない。しかし、先ほども引用したように、スペイン人とインディアンとの混交 (mestizaje) の結果生まれたメスティーサMonicaこそが「新しい世紀」の希望だとする第一部で見られた捉え方には、アステカの過去にまでさかのぼらず、16世紀の混交の時点に己の起源を求めるRodriguezと共通するものがある。

IV

Rodriguezが認知し称揚しようとする mestizajeは、“Chicano-Anglo”に限定されずあらゆる人種間の混交全般を指すものであり、そのことが混濁を表わす“brown”で表現されていた。*The Rag Doll Plagues*も第三部“LAMEX”に至ると、メキシコ系とアジア系のカップルの登場となる。この小説においても混濁の度合いは高まっていくのだ。もう一度Bruce-Novoaを引き合いに出せば、かつて多くのチカーノ作家にとって mestizajeは“an ongoing process” (56) ではなく、“fixed and finished in the past” (ibid.) として概念化されていた。しかし、第一部でスペイン人とインディアン、第二部でチカーノとユダヤ系 (またはアングロ) のあと、チカーノとアジア系のカップルを登場させるという進め方は、Moralesがmestizajeを“an ongoing process”と捉えていることを示している。その意味で、Martin-Rodriguezが、この作品でMoralesが提示しようとしたのは“continuous mestizaje” (94) であると指摘し、さらには“[T]he emphasis is on the process” (ibid.) と述べているのは正しい。

Moralesが本質主義から自由な作家であることを示そうとするあまり、Richard Rodriguezとの類似を強調しすぎたかもしれない。1970年代、80年代当時の典型的チカーノ作家とは異質であるものの、Moralesは

やはり、基本的にはチカーノ・レジスタンス文学の系譜に連なる作家である。*The Rag Doll Plagues*でも、その全体を通してメキシコ系という〈民族〉の側に立ち、ドミナントな体制への批判を展開している。ただ、時代を21世紀末という近未来に設定して寓話性を高めた第三部では特にそうであるが、その批判はユーモアさえ感じさせる風刺の形をとっていて、作品を平板なプロパガンダにしてしまいかねないストレートな体制批判にはなっていない。また、己の属するグループに完全に一体化せず、一定の距離をとって客観的な視線を向けている。

第三部は、タイトル“LAMEX”が示す通り、第一部の舞台メキシコ・シティーと第二部の舞台であったロサンゼルスが舞台である。より正確に言えば、国境が溶解してそれら二つの都市が一つと化した地域が舞台である。この地域は“Lamex Coastal Region”と呼ばれている。コンピュータ化があらゆる面で進んでおり、フリーウェイに代わって、“computer travelways”と呼ばれるものが音速スピードで二都市を結んでいる。主人公は、第二部の主人公を「祖父」と呼ぶGregory Revueltasである。三人目のGregory/Gregorioであるが、彼もまた医師で、“Lamex Health Corridor”という名の、地域全体をカバーする医療機関の医局長として勤務している。しかし、この第三のGregoryは、テクノロジーの発達と不可分な形で進歩したはずの医療技術を要求される仕事に就きながら、医療現場だけではなく社会全体の変化に違和感を覚えている人物として設定されている。たとえば、彼は「50年前までは人気のあった紙の本 (“paper books which were popular fifty years ago” (141))」を、「昔風の読み方で (“in the old-fashioned way of reading” (ibid.))」読むのを楽しみにしている。書籍といえば電子書籍を指すのが当たり前になっている21世紀末に暮らしながら、Gregoryは「まるで人の肌のような紙 (“almost living skin-like paper” (142))」の感触に抗しがたい魅力を感じていて、その嗜好を自分でも“a fetish” (ibid.) と、自虐的に表現している。しかも、彼が好んで読むのは、誰も読まなくなったフィクション (物語) と歴史の本である。これらの本はもはや市中には出回っておらず、資料館に〈保存〉されているのみなのだが、Gregoryは祖父Gregory (第二部の主人公) が20世紀に建てた家に住んでいて、そこには祖父の蔵書が大量に残されていたのだ。

Moralesが主人公をテクノロジー嫌いの人物に仕立て上げたのには、Morales自身のそれこそ嗜好の問題

もあったと推測されるが、それに加えて小説の構成とテーマに関わる必然性もあった。ここでMoralesは、テクノロジーが発達という名のもとに暴走し、人間が物体化、モノ化されるまでにおよぶ未来図を批判的に示そうとしている。しかもMoralesは、それを異人種混交のテーマと絡めつつ行なっている。つまり、モノ化された具体例として登場するのは、彼の恋人でアジア系（中国系）のGabi Chungなのである。彼女はGregoryのアシスタントも務める医師であるが、医療情報・知識の効果的で迅速な集積と伝達のため、片腕を切断して、代わりにそこにコンピュータを装着している。身体の一部が物体の、ハイブリッドでありサイボーグである。医療に従事していて一定の地位にあるものは、その地位の保持または昇進のためには、だれもがGabiのようになることを求められプレッシャーをかけられていて、Gregoryも例外ではない。「模範的で最適で有能な医者（“a model optimum efficient doctor”（143））」と当局に認定され、医局長という地位を維持するために、彼も自分の左腕を切断しコンピュータを装着する可能性について考える。しかし、最終的には当局の意向に背く決定をする。その決定に至った事情について、“Voices from the past and present warned me not to allow them to deconstruct my humanity”（ibid.）とある。ここで、“deconstruct”はdestroyとほぼ同義のネガティブな意味合いで使われていると考えてよいだろう。恋人のGabiをはじめとする多くの同僚と違い、効率性を高めるための身体改造を“humanity”の解体と捉える感覚が、Gregoryにはまだ残っていた。別のところでも、腕を切断して人間を“a computerized knowledge bank”（136）にしまおうとする試みに触れて、“The competition to accumulate knowledge into one brain and one body for immediate access had escalated for fifty years, since the world had turned against humanity”（ibid.）と語っている。要するに、医療の世界に限定されているものの、人間のデータベース化を目指す時代の趨勢に与しないのである。こうしてサイボーグになることに抵抗し続けたGregoryは、それを理由に降格させられ謹慎処分も受けている。GabiのほうはLamex Health Corridor当局の指示に従い、“computer arm experiment”（196）に積極的に参加したのだったが、頻繁に行なわれる充電作業のたびに焼け焦げたようなにおいを出すようになる。コンピュータという異物への拒絶反応が出たのであろう。肉体と機械との＜混交＞の失敗である。第三部の終わりで、疲れ果て将来

も悲観したGabiは、意図的に大量の電流を自分の体内に流し込み自殺する。四肢を切断された状態で出産し、直後に死んでいった第一部のMariselaを思い起こさせる。

第二部の主人公はユダヤ系を恋人としていたが、第三部ではメキシコ系とアジア系との恋愛関係となっていて、ここでも“continuous mestizaje”を確認できる。こういう組み合わせの“mestizaje”には必然性があったことをMoralesは小説中で示している。20世紀から21世紀への世紀転換期の、ロサンゼルス地域へのアジアからの移民流入に言及しつつ、“Monterey Park/East Los Angeles was a center for Mexican/Asian culture”（148）とあり、続けて、“The Chinese had become the dominant force in sheer numbers”（ibid.）と、Gregoryは語る。さらには、2020年までにはロサンゼルス地域のメキシコ系の人口は2500万人に達していたことが示されたあと、“In order to survive and coexist, the Mexicans and Asians united economically, politically, culturally and racially. The common cross-cultural, racial marriages were between Asians and Mexicans”（ibid.）とある。メキシコ系とアジア系との間の異人種および異文化の混交は、21世紀末には珍しい現象ではなくなっていたということである。Gregoryの相手が中国系のGabiであったのも、時代の流れを表わしているものだった。Bruce-Novoaに倣って言えば、Chicano-Asian American mestizajeが実現した社会ということになるだろうか。

21世紀末という時代設定の第三部でも、人々は疫病に苦しめられている。今度の疫病は“Blue Buster”と呼ばれている。Gabiが元気だったころは、彼女をアシスタントとしてこの疫病について調査し、対策を講じることにGregoryは全力を注いだ。ただ、ここでの疫病は、前二部の場合と違い、その発生の原因が明瞭な疫病である。要するに、人間による環境汚染が生み出した疫病なのである。

Totally unpredictable, these spontaneous plagues could appear anywhere. Produced by humanity's harvest of waste, they traveled through the air, land and sea and penetrated populated areas, sometimes killing thousands. Scientists throughout the world had identified thousands of these living cancers of the earth. They were of all sizes, colors and smells. Some were invisible. From our pollution we had

created energy masses that destroyed or deformed everything in their path.

Born in the depths of the Pacific Ocean about one hundred miles offshore, three huge masses of filth had developed organically and begun to move of their own accord. [...] If these masses of living waste were to throw themselves onto the coastal shores, there would be an unavoidable catastrophe. (138-39)

新しい疫病は、人間が投棄した廃棄物から生まれ、自らの意志を持って動く有機物になるに至った。別のところでは、“this human-made beast” (185) とも呼ばれている。この疫病が“Lamex”地域の人々を、特にロサンゼルス周辺の人々を襲い、多数の犠牲者が出る。なかでもアングロと呼ばれる人たち、要するに白人たちに犠牲者が目立って多い。小説の終わり近くになって、まったくの偶然からGregoryがこの疫病の蔓延を防ぐ方法を発見するのだが、そのあたりからの展開は、作品中で最も風刺と皮肉とユーモアの効いたものとなっていて、*The Rag Doll Plagues*が寓話であることを改めて確認させる。Gregoryが発見した疫病の治癒と予防の方法とは、メキシコ・シティー育ちのメキシコ人の血を輸血するというものであった。長い間汚染に晒されて生きてきた“Mexico City Mexican (MCM)”には、遺伝子変異が起こり、通常の人にはない種類の耐性ができたらしいというのである。そのMCMの血を体内に取り込めば疫病に冒される危険性は低くなる、というのがGregoryの発見したことであった。つまり、Herrera-Sobekの言葉を借用するなら、MCMの血は「ワクチン」の効果を持つのである。(106) そのことが分かってから、ロサンゼルス近辺ではメキシコ人に対する<需要>が急激に高まる。アングロの間ではMCM争奪戦が繰り広げられ“the MCM business”なるものが生まれて、数か月のうちに“multimillion-dollar industry” (194) へと成長する。

The urgent need to possess Mexican blood reached the point of absurdity. The newspapers carried ridiculous articles about families fighting over one Mexican, or a family of Mexicans who refused to be separated. Euroanglos always wanted to be photographed with their Mexican at their side. People took their Mexicans everywhere, fearing that friends or relatives

would steal them. Millions of MCMs signed contracts of blood enslavement. Here again, the Mexican populations became the backbone of the LAMEX corridor. (195)

ユーモアを伴う風刺は明瞭であろう。メキシコ育ちのメキシコ人 (MCM) が商品化されていることが、“blood enslavement”と表現されている。最後の文では、メキシコ人が「再び」“backbone”になったとある。つまりメキシコ人は歴史上常に合衆国を支えてきたということだ。「ワクチン」としてアングロの生存に欠かせないということで、ここでは一躍脚光を浴び、その存在の重要性を誰もが認めないわけにはいなくなかった。しかし、認知されはしないものの、畑で、工場で、モーターで、メキシコ人は遠い昔からその<血と汗>によって合衆国社会の「屋台骨 (“backbone”）」であり続けた。生活を依存する欠かせない存在であり続けた。上の一節に表現されたものも含むMCMをめぐる騒ぎが寓意しているのは、そういうことであろう。21世紀末に設定して、このようにメキシコ人が商品化され奴隷扱いされる世界を描き出すということは、それだけMoralesの現代アメリカに対する認識が暗いということを示しているであろう。近未来小説の形をとった寓話に描き出されるものは、それが人種問題であれ環境問題であれ、作者の現状認識の誇張された反映であることが常である。

いずれにしても、メキシコ人の血の問題に触れるときのMoralesの筆致には、厳しい批判が感じられる。MCMの血が「ワクチン」として有効でありその輸血によって多くの命が救えることが判明しても、Lamexの医療当局は輸血を開始することをためらう。それは“psychologically structured prejudices” (183) があるからだ、MoralesはGabiに言わせている。メキシコ人といえば、MCMも他の地域に住む者も一緒くたにして、歯止めなく北上・侵入してきて合衆国を汚染する異物というイメージが定着していることを批判したものであろう。その批判は、汚染源だったものが万能薬として人気商品に転化するという皮肉な展開により辛辣さを増している。ただ、この輸血の件に関しても、Moralesの念頭には混交のテーマがあったようだ。MCMの血をアングロに輸血して効果があるのは、あくまで異性への輸血であった場合に限られるということにしてあって、“[T]he transfusions could not be made from male to male, nor female to female, but from male to female or female to male” (168) とある。

いわばヘテロな輸血でなければならないわけだ。メキシコ人男性の血がアングロの女性に流れ込み、メキシコ人女性の血がアングロの男性に入るのだからなければならない。このような形の輸血は、一種の、あるいは比喩としての、異人種混交 (miscegenation) ではないか。異性からもらう血でなければ効果がないというのは医学的には根拠のない話である。根拠がないことを承知のうえで、Moralesはわざわざ異性間の輸血に限定されねばならないとしている。やはり何らかの意図があったと考えざるを得ない。比喩的な「血の交わり」という意味合いを、MCMからアングロへの輸血に持たせようとしたのではないだろうか。だとすれば、主人公Gregoryとアジア系のGabiとの関係もあることであるし、第三部で描き出される混交は二重の構造を持っていたことになる。

しかし、第二部のGregoryの場合と同様に、第三部のGregoryも恋人Gabiを失い、彼女との間に子どもをもうけることはなかった。その意味では異人種混交は成就していない。だが、第三部では、Moralesは別のカップルを登場させ、GregoryとGabiのいわば代理を務めさせている。そのカップルとは、中国系三世のTed Chen と、“a native Mexican Californian” (148)、つまりはチカーナのAmaliaである。二人は結婚して一年ほどがたつ夫婦で、GregoryとGabiがよく通うレストランのオーナーであった。二人は子どもをつくったものかどうか迷っていたのだが、結局家族をもつことに決め、Gabiの死後にAmaliaは出産する。男女が逆ではあるものの、これら二組のカップルはメキシコ系と中国系のカップルという点で重なり合う。Gabiが亡くなって3年後、自宅にいるGregoryは小説の終わりの部分で次のように思いをめぐらす。

From up here, surrounded by thousands of books, I wonder when will I have time to love a woman and have children, like normal people did in the late twentieth century. I can only protect and enjoy Ted and Amalia's baby, for that child represents the hope for the new millennium. (199-200)

前にも使った表現を再び使うなら、GregoryにとってTedとAmaliaの子どもは、自分とGabiとのあいだに生まれたかもしれないChicano-Asian American mestizajeの具体化である。その子どもを「守り慈しむ (“protect and enjoy”）」と言っている。そしてそ

れは、その子どもが「新千年紀への希望 (“hope for the new millennium”）」を表わしているからだとも。ここでの「希望」に、第一部の主人公Gregorioが、自分が出産に立ち会って生まれたメスティーサMonicaに「新しい世紀」の到来を見ようとした心情の反響を聞くことができる。GregorioはMonicaを養子にして自分の子として育てたのだった。GregoryもTedとAmaliaの子どもを、自分の子のように「守り慈しむ」たいと思っている。

“Dynamic Identities in Heterotopia”と題したエッセイのなかで、Moralesはアメリカ南西部について語り、“[I]dentity is not fixed” (24) と述べている。さらに、南カリフォルニアに触れて、“It is an unending, unfinished process of continuous movement, of ceaseless change, of always becoming, of perpetual transformation” (ibid.) とも述べている。アイデンティティの流動性が語られ、それを受け入れようとする姿勢も伝わってくる。それぞれの人種・民族性にこだわらないTedとAmaliaの間に生まれた子どもにGregoryが愛着を感じ「希望」さえ見出すのは、その子どもが“always becoming”を具現する存在だからだ。GregorioとメスティーサMonicaの関係についても事情は同様であっただろう。

Ted夫婦が子どもをつくるかどうかまだ決めかねていたころ、Gregoryは彼のレストランで食事をしたことがあった。そのときの様子が、“At the house restaurant, Ted prepared a succulent meal of Mexican and Chinese cuisine. I had never tasted such exquisite flavors” (175) と表現されている。Tedが用意してくれたのは、それまで味わったことのないような素晴らしい味の“Mexican and Chinese cuisine”だったのである。これを、上に引用した小説の終りの一節につながる伏線として読んでもよいだろう。本来互いに異質な“Mexican”と“Chinese”が精妙に混ざり合った料理。これは常に更新され形を変えていく“continuous mestizaje”の比喩表現ともとれる。Gregoryは、Tedからの贈りものとして、“Mexican”と“Chinese”の混交から生まれ、そのどちらでもありどちらでもない、新たなメスティーソ/メスティーサを「味わう (enjoy)」のである。

Works Cited

- Bruce-Novoa, Juan. *Retrospace: Collected Essays on Chicano Literature*. Huston: Arte Publico Pr., 1990.
- Duran, Javier. “Alejandro Morales.” Ed. Alan West-Durán.

- Latino and Latina Writers I*. NY: Charles Scribner's Sons, 2004.
- Franco, Dean J. *Ethnic American Literature: Comparing Chicano, Jewish, and African American Writing*. Charlottesville: U of Virginia Pr., 2006.
- Herrera-Sobek, Maria. "Epidemics, Epistemophilia, and Racism: Ecological Literary Criticism and *The Rag Doll Plagues*." Ed. José Antonio Gurpegui. *Alejandro Morales: Fiction Past, Present, Future Perfect*. Tempe. Bilingual Pr., 1996. 99-108.
- Lozano, Miguel Lopez. "The Politics of Blood: Miscegenation and Phobias of Contagion in Alejandro Morales's *The Rag Doll Plagues*." *Aztlan* 28:1 (Spring 2003): 39-73.
- Marquez, Antonio C. "The Use and Abuse of History in Alejandro Morales's *The Brick People* and *The Rag Doll Plagues*." Ed. José Antonio Gurpegui. *Alejandro Morales: Fiction Past, Present, Future Perfect*. Tempe. Bilingual Pr., 1996. 76-85.
- Martin-Rodriguez, Manuel M. "The Global Border: Transnationalism and Cultural Hybridism in Alejandro Morales's *The Rag Doll Plagues*." Ed. José Antonio Gurpegui. *Alejandro Morales: Fiction Past, Present, Future Perfect*. Tempe. Bilingual Pr., 1996. 86-98.
- Morales, Alejandro. *The Rag Doll Plagues*. Houston: Arte Publico Pr., 1992.
- . "Dynamic Identities in Heterotopia." Ed. José Antonio Gurpegui. *Alejandro Morales: Fiction Past, Present, Future Perfect*. Tempe. Bilingual Pr., 1996. 14-27.
- Priewe, Marc. "Bio-Politics and the ContamiNation of the Body in Alejandro Morales' *The Rag Doll Plagues*." *MELUS*, 29. 3/4 (Fall/Winter 2004): 397-412.
- Rodriguez, Richard. *Brown: The Last Discovery of America*. NY: Viking, 2002.
- Tatum, Charles M. *Chicano and Chicana Literature: Otra Voz del Pueblo*. Tucson: U of Arizona Pr., 2006.
- Villalobos, José Pablo. "Border Real, Border Metaphor: Altering Boundaries in Miguel Mendez and Alejandro Morales." *Arizona Journal of Cultural Studies*. 4 (2000): 131-40.
- Wildermuth, Kurt. Rev. of *The Rag Doll Plagues*, by Alejandro Morales. *MELUS*, 19, 1 (Spring 1994): 121-23.